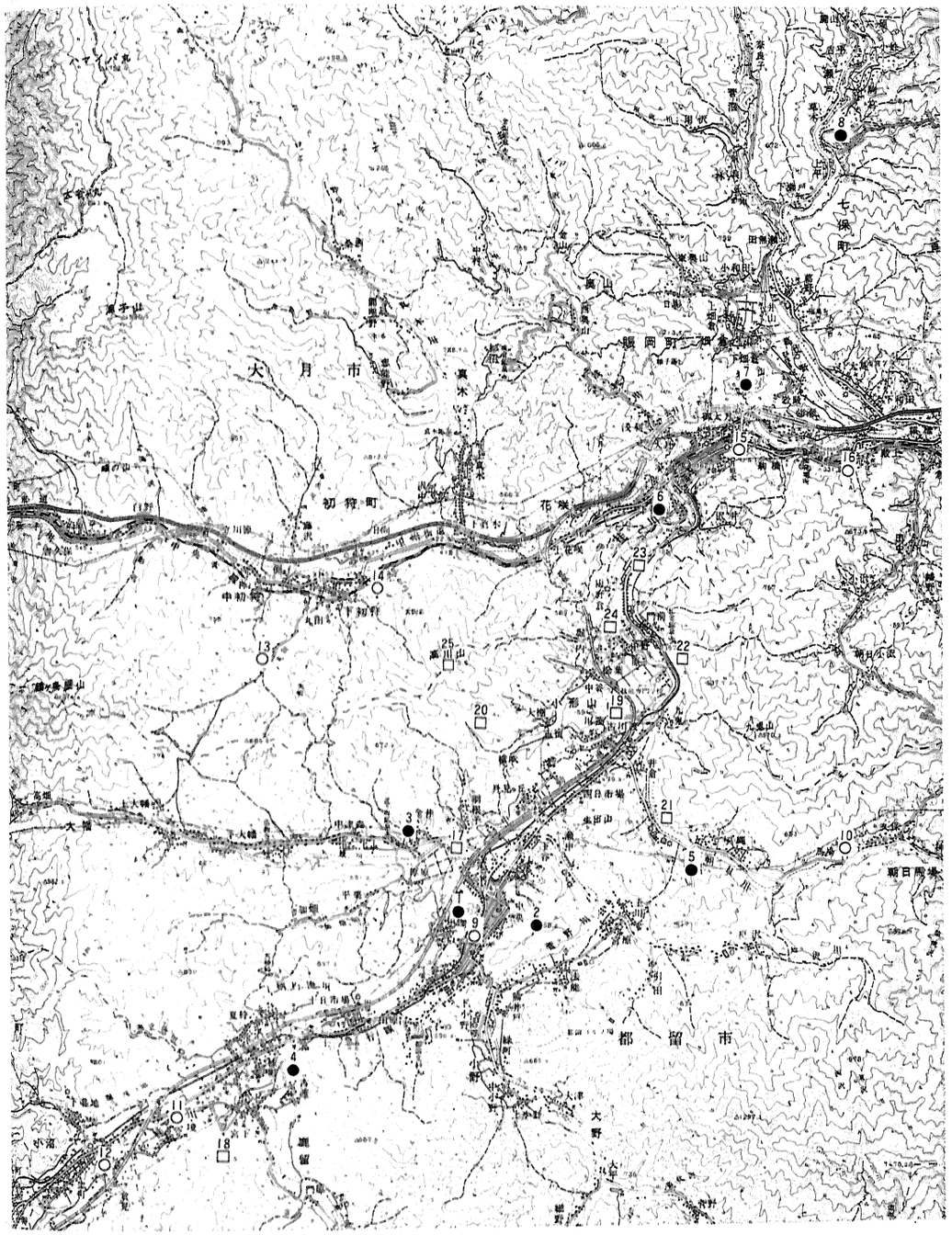


第１図　中世城館址位置図（●城郭址　○伝承地　□地名からの考証地）

都留市史

資料編　古代・中世　近世Ⅰ

１　勝山城

都留市川棚字城山

当城の占地は、都留市街地の西方桂川の対岸、川棚の城山にある。城山は、標高五七一メートルの独立峰で川棚よりの比高差も約一〇〇メートルあり築城時の縄張展開に十分な山城を有する好地である。

この城山は、三ツ峠山から東方に派生する尾根の先端にあり、尾根と城山の間に南北双方より自然の谷が切れ込み、さらに城山の北、東、南を桂川の深い渓谷が廻る天然の要害に位置している。

このような天然の要害地に、あえて近世城郭を築城する事例は、天正期に全国展開する織豊系城郭によく見られるもので、まだまだ戦国的な政情をよく反映したものと考えられ、当城もそれらの代表的な占地を示す城郭といえる。

当城の城郭遺構は、築城時の縄張をよく保存するもので、全国的に見ても貴重な城郭事例の一つであったが、ただ残念なことは中央道建設により、外郭部外堀ラインが一部破壊された事である。

また『甲斐国志』にはこの城についての概要が説明されていて、それは現存する縄張とよく一致する。しかし、『甲斐国志』に概説されている城郭遺構の説明では、各曲輪の防御技術やその意味について記述が無いので、その部分を中心に考察してみたい。

曲輪①は、方形に近い形状に削平されており、西南の角に二段の櫓台がある。北側の台には東照宮があり、その南側は一段高くほぼ正方形に櫓台が構築されている。その正方形の櫓台よりさらに西南方向に下りながら突出しているが、そのような自然地形にかかわらず、この櫓台が正方形を保っているところに注目すべきである。

この正方形の台は、天守台と称すべき大きさと西側城外を展望する好位置にある。このような天守台は、朝鮮半島に残されている文禄慶長の役で作られた豊臣系城郭の倭城の代表例である釜山城や機張城天守台の位置と酷似している（ただし、両城の天守台は石垣で築かれている）。

この曲輪への虎口は、南北二か所ある。北虎口の保存状況は良いが、南虎口の現状には問題があり、後世の遊歩道建設によると考えられる。

北虎口は、図のように曲輪①より出る所にちょうど竪堀を落としていて、まことに防御に適した好位置に築かれている。

竪堀の開始地点に出た通路は、東西に分岐して一方は西北に下りながら曲輪②の回廊状地形に出る。その途中に石垣が一部残っているところがある。曲輪①は、現在ほとんど石垣は埋もれているが石垣により築かれていたと想定できよう。

東に下る通路は、曲輪①東北尾根正面に出てからジグザグに下り曲輪⑤に出る。

しかし、この通路は、曲輪①の東北角を正面にして登るようにしている。ここは北虎口へ直接正面に登らさずに少しずらす事により防御を強化していると思われる。また、曲輪⑤の上部斜面上（図面上は〰の線で表示）のところに約七本の連続竪堀群と想定できるものも確認できる。ここは曲輪③から延びて来た回廊状の通路に接するところでもあり、このあたりを封鎖するためと考えられる。

南虎口は、現遊歩道の位置ではなく、曲輪①の長く東南に突出する地形に南に向かって開いている入り口が本来の虎口であろう。この虎口を出て九〇度曲がって突出する地形に下るようになっている。この虎口は、現在の東南に突出する地形に出るだけでなく、本来のルートにつながっていたであろう。現在は失われているが、東南に突出する地形より曲輪②へ下る通路があったのではなかろうか。なお、遊歩道が曲輪①へ登る途中に石垣が一部残存している。

曲輪②は、ほぼ曲輪①を北・西・南の三面を囲うようにある。曲輪の面積は当城内最大であり、また、防御面でも最大の効果を発揮するところで攻防時の主役を演ずるところといえる。

この曲輪の防御は曲輪下を北より南へ折れながら大きく延びる中腹の大横堀で、当城最大の防御拠点でもある。

横堀が北へぬけるところに曲輪④がある。北尾根の付根部分に計九本の巨大な竪堀群がある。ここは敵が侵入する場合の最適地と考えられるため、北尾根から横堀内への侵入を遮断する目的で築かれたものである。この竪堀群は、横堀を中心にして上・中・下の三段に配置されたもので、竪堀群の防御がより有効にするべく立体的に築いている。

横堀の対岸の曲輪②斜面の反対側は、自然の地形ではなく、土塁状に整形したものが北より南の折曲点まで見られる。その北端の土塁Aの塁上は、かなり広い長方形で、櫓台と考えられ、横堀と巨大竪堀群と、ともに防御する拠点となるところといえる。

この土塁状に整形した地形が北から東へほぼ直角に折れる横堀の外が広めの土塁状に残った地形に見える。その先の直下、西南尾根上の地形Bの付根西よりに広めの喰い込んだ堀があり、その堀は西斜面を下る巨大竪堀に落ちる。この広めの喰い込んだ堀により規定された横堀外側の地形Bも北端上にある台状地形のAと同様のもので西南尾根上を防御する櫓台と考えられる。

さらに、横堀が北から東へ折曲した先端で、横堀が南斜面へ竪堀として落ちる地点の横堀の外側の地形Cも、北端Aや西南のBほど明瞭ではないが、ここも防御拠点としての広さを持つ。しかし、塁上が十分な広さを持っていないため、これを補うため南斜面直下に一段の帯曲輪Dが築かれている。また、対岸の曲輪③の直下にDの帯曲輪と同じレベルの位置に帯曲輪Eがあり、南斜面へ下る横堀の東端を防御している。

曲輪②を囲むように延びる大横堀は、当城の内堀を形成するもので、これは南斜面を桂川の支流まで落下する長大なものである。

この落下する途中の南斜面を東西に横断する登城路（現在の遊歩道と同一）が交差する竪堀内の通過地点Fは、防御に有効性を持つために凹曲面状に迂回する通路に築かれている。また、F地点の竪堀の左右に小曲輪が築かれU字形に迂回する通路を挟むように攻撃するようになっている。当時の竪堀を横断する通路に対する防御として極めて有効な位置にあるといえる。

このF地点の攻防をコントロールする曲輪としては、さらにF地点の頭上に位置する曲輪Gが考えられる。

G地点は、当城の尾根が南に突出する位置で、桂川や桂川と外郭線である外堀の接点上や、さらに外側の台地あたりも抑えうる南西最大の防御拠点でもある。

F地点での登城路は、遊歩道と同一になっているが、竪堀を東に渡った位置からは違っているようである。

遊歩道はそのまま曲輪Gの斜面を巻くように登り、G地点に至るが、登城路はF地点を渡り、すぐ頭上の小曲輪を経て、さらに小曲輪より少し上に残存している登城路を登り、再び遊歩道と一致して曲輪Gへ登ったと考えられる。

曲輪②の北面を見ると回廊状の曲輪になりながらも数段の段差をつけて曲輪④の対岸まで至る。

この回廊状曲輪は途中で曲輪①の北虎口より下って来る通路と一緒になる。この地点より北側に突出する尾根上に石垣で三段に固められた上に小削平面がある。この石垣で固められた三段の西側が通路になりH地点の削平面に下るように築かれている。大きく見れば曲輪②の回廊状曲輪のつづきと考えられるが、機能的な視点から考えれば曲輪④を遮断する北尾根の大堀切の内側にある曲輪である。北尾根を二段に防御する構えの二段目の防御拠点として考えられて

中世城館址

いたのであろう。

しかし、曲輪Hの南面の三段に固めた石垣は何と理解すべきかわからない。防御ならば一段の高石垣を築くべき位置でもあるが、なぜこのようにしたかは不明である。

北尾根先端を防御する曲輪④は、曲輪①、②に匹敵する広さを持つ。四周を横堀を巡らしていた可能性があり、他の曲輪より特別に強化された防御を備えている。

しかし、攻防戦においては、曲輪Hが最前線になるような大横堀防御ラインの外側に曲輪④は位置している。むしろ現存の曲輪④は曲輪①、②より隔離するように構築されている曲輪と見るべきものであろう。これは全体の縄張から見て、特殊な位置にあるものといえる。防御性を最優先する縄張ならば曲輪④北方の尾根上はゆるい下り斜面になっている地形なので、むしろここに堀切がほしいところであるが、実際には堀切は入れていない。

曲輪②から曲輪③へ下る登城路は、現在の遊歩道のルートではなく、曲輪③の西端、だんだんと高く登って行く廊下状の地形であったと考えられる。

このルートだと曲輪②からの横矢掛けが有効性を持つところでもある。曲輪③自体も曲輪とするよりもむしろ曲輪②へのステップの段と考えた方がよいところである。それは、曲輪③内の削平面は必ずしも単一に構成されていないことからもわかる。

登城路がF・Gを通過して南尾根を登って曲輪③に至る直前に、東側に土塁があり、西側は曲輪③が一段高く位置しているMがある。ここは通路状の一種の桝形であろう。このM空間より現在の遊歩道は北へ直登するようになっているが、これは後世にできた道で築城時の登城道はL地点にある桝形虎口を通過して曲輪③に入り、さらに西へ直行して曲輪②へ登るのであろう。

それは現行の遊歩道ルートにともないくつかの遺構によって考えられる。すなわち、曲輪②の東南端、竪堀Iを落としていること、また、曲輪③から一段あがって東側へ廻り込む回廊状の曲輪上に曲輪③よりの侵入を阻止するようにJ地点に空堀を入れている。

これらIおよびJ地点の防御からこの方面は完全に遮断していることから現遊歩道のルートはなかったと考えられるのである。

曲輪③から続く回廊状曲輪は、J空堀とK竪堀に挟まれた小曲輪を作っている。この小曲輪は東南尾根を防御する拠点となっている。

当城の東南尾根斜面は、南北両面に竪堀か自然の崩壊の溝か判断のつかないような地形の連続である。いずれにしろ、この方面からの攻撃は一番困難なところであるといえる。反対に城内側は守備しやすいところでもある。

曲輪③からの回廊は、さらに曲輪⑤につづきそうになっているが、先に述べた約七本の連続竪堀群上の小削平地東角より竪に防御ラインがあることにより、曲輪⑤がある東尾根上に同一レベルで通過できない構造になっている。ここは途中よりいったん下ってから曲輪⑤へ至るようになっている。

東尾根にある曲輪⑤は、この尾根上最大の防御拠点で北端角下の

斜面上に四本の竪堀があり、未確認だが桂川より登って来る登城道に対する虎口をこれら竪堀群で防御している可能性がある。

曲輪⑤東南斜面直下にU字状地形にそって壁を構築している。この壁は北に突出したところにある竪堀群と曲輪⑤からさらに東へ下る尾根上に三段の小曲輪を築いた尾根につづいており、曲輪⑤の周辺部に強固な防御ラインを構成している。

次に、中腹大横堀の内ラインと裾野にある外堀ラインに挟まれた内側斜面上に点在する防御遺構について考えて見る。

大横堀の下、西尾根が二股に分かれる。両先端に数段の削平地がある。特に、北側に分かれた尾根上は先端が曲輪と判定できる削平地と付根に小削平地の二段がある。この地は現在中央道の直上にあたり、本来裾に築かれていた外堀を見下す位置で、外堀ラインが北上して桂川に至る付近を抑える拠点となる曲輪と考えられる。

西南尾根のB地点より下った裾に神社があり、当神社西側に土塁が存在する。しかし、この土塁とその内側の三段に築かれた段については、城郭としての使用目的が考えられないので、神社のために築かれたものと判断せざるを得ない。

しかし、当神社を中心に左右に延びる切岸状の壁ラインは、防御に有効なものと判断できる。ただこの壁ラインは、この壁から外堀との間に広がる大帯状の空閑地が城郭に付属する屋敷地に利用したものならば、屋敷地造成で出現した壁ラインで特に防御を意識して築造したものではないと考えられる。

東・東南・南に突出する尾根の裾は、地形が急傾斜のため、なかなかの要害地形になっているが、そこに竪堀か自然の崩壊の溝か不明の「堀」が数条あり、それが有効に働き、ますますこの方面からの攻撃を不可能にしている。

しかし、自然の崩壊の溝でない竪堀が七本は数えられ、特に、東南尾根にあるものは三本の連続竪堀群と判断できるものであり、この桂川沿の面は最高の防御機能を持つところといえる。

「谷村城下絵図」（横山脩治家所蔵）にある内橋がこの付近にあったとされる。しかし、この内橋があったとすれば、最も危険なところから城内に内橋を架けることになるので、築城時には存在した可能性は少ないのではなかろうか。

外郭部としての遺構は、「泥田堀」と称する外堀が川棚付近の桂川から「お城山」を巡って西側谷沿いに北上して再び桂川に入る大外部の外堀がある。また、北側から東側には桂川の本流が深い渓谷を作っている。天然の大堀と人工による堀との組合せによる「お城山」を一周する巨大な外堀を形成している。

なお、川棚付近に見える外堀の幅であるが窪田薫氏の『都留郡勝山城について』では「外堀は泥田堀で幅三〇メートル、高さ二メートルである」とされている。しかし、西南尾根裾に現存する外堀幅が約五～六メートルでしかない。また、この外堀延長線の東端、桂川支流へ落ちる水田の斜面に同規模と考えられるコンクリート固めの堀跡と想定できるところが存在することから考えると、この「泥田堀」は現在の水田の幅部分ではなく、西南尾根裾にある外堀幅と同規模なものでしかなかったのではないか。現行の三〇メートルは

水田開墾時に出現した幅であると考える方がよいと思われる。

外堀は、自然地形を利用しながら「お城山」の西側を廻っているが、これを細かく見ると西南尾根裾の角より北上して中央道で消滅している約一〇〇メートルの間に防御に有効な折が二か所残存している。中央道と谷筋の新道建設で破壊された外堀に横矢掛けの折りが相当程度存在したことが推定できる貴重な残存遺構である。

「お城山」の西側を半周する人工の外堀幅は、先に述べたとおり約五～六メートル程度のものと考えている。

「泥田堀」を渡った台地の南側は桂川の断崖であるが、西側が山続きで防御上は弱点がある。しかし、ここは陽当たりのよい居住に絶好な台地で、広さもある程度確保できる。この台地を南北に横断する現行の道路より東側台地上に城主の居館があったと考えてよいだろう。また、道路の西側に家臣団の屋敷が想定され、城下部分を形成していたと思われる。

桂川を渡った東側、いわゆる谷村町地域は当城が築城された頃は、「城下町」として存在したものではなく、以前から存在した商業地区としての機能する町並みであったと考えられ、家臣団の屋敷地とは隔離された関係にあったと考えられる。

縄張全体から考えると、東側桂川方面は地形的にすこぶる要害でこちらからの攻撃を想定していない。すべて西側対岸の山塊を足場に攻城戦をすることを想定し、中腹の大横堀やそれにつづく大竪堀で遮断、山頂の天守台も西側に寄せて防御に使い、なお、西側山裾部の外堀で防御する大構想による縄張で築城された城郭である。

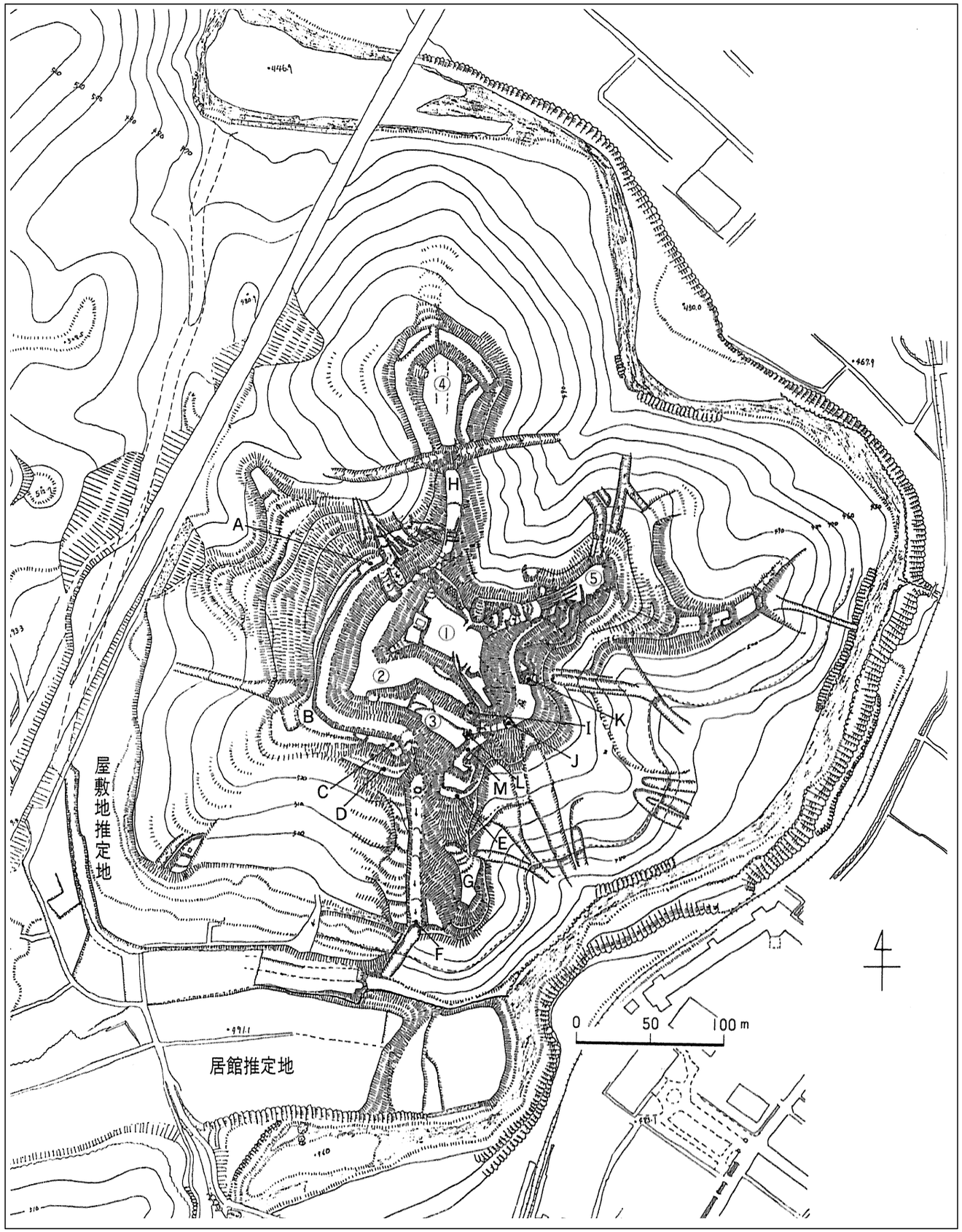
また、西の外堀の外で堀に最も近い五一二メートル高地を調査した。ここでは社があり、それに伴い二、三段に削平されている。そこに現行の道路が堀切状に建設されていて一見臨時の築城遺構のように見えるが、全体の地形などを考えると、臨時の築城遺構と考えるのは無理であろう。

このような縄張を持つ当城の築城者であるが、浅野氏以前に築城があったとするなら、それは『北藤録』に「光泰甲州拝領ハ天正一八年庚寅、入部ハ翌年一九年辛卯也」記載された加藤光泰の時代と考えるべきである。さらに同書に「加藤遠江守光泰当国ヲ領スル時光泰ノ家臣加藤信濃守光吉郡内ノ城ニ居ス」とある。勝山城はまさしく豊臣系大名によって築城された城郭で、加藤氏、浅野氏によって完工したと考えるべきものである。

天守台、中腹の横堀ライン、裾部の外堀ラインで構成する縄張はまさに加藤氏、浅野氏が甲州在領中に出陣した文禄慶長の役での日本軍の築城した倭城のグランドプランに類似していることからも、この時期の城郭と考えたいものである。

なお、曲輪④は、他と異質のプランであることから、この部分は加藤氏、浅野氏時代の築城プランではなく、後世秋元氏時代の改修されたプランではないだろうか。

（池田　誠）



第２図　勝山城縄張図（作図：池田誠　調査日；1991.2.3、3.3）